

プラパゴン⑦

- (1) 魔王プラパゴンとその母親は、肉を焼いて食事をしておりました。「おふくろ、この飲み物はなかなかうまいぞ」「では私も、イキギモを食べることにしようかね」
- (2) そのにおいが、穴ぐらの奥にとらわれているポーソンのところまで流れてきました。「あらいやだ、人間の肉のこげるにおいだわ。今に私も、あぁなってしまうのかしら」
- (3) その頃であります。妹のポーソンを助けて砂漠の魔王プラパゴンを退治しようと、アリーはデブのドリゴを連れて、山の方へ向かって歩いていました。焼け付くような日の光。どこまで行っても続いている砂漠であります。二人がやってくると、
- (4) 「おや、これはなんでしょう。なにか骨のようですね」「この骨、動いているぞ」二人は驚いていましたが、その時であります。
- (5) 砂が空中高く舞い上がり、手だけ出していた怪物が突然に、アリーとドリゴの前にその姿を現したのであります。
- (6) 「ラオー。お前らふたり、とって食うぞ」アリーは剣を抜いて立ちふさがりました。そして
- (7) 「エーイ」と横なぎにひと振り振れば、何者も切り倒す事のできる名剣であります。続いてもうひと太刀。
- (8) 「ヤーッ」骨の怪物は、まっ二つに切り裂かれました。するとどこからか「ハラショー、ハラショー、テンホウ、テンホウ」という声が。
- (9) よくよく見ると骨の怪物から出てきたのは、中国の小人のおじいさんでした。「ハラショー、あなた、なかなか勇気があるね。私、気に入りました。いいもの、あげましょう」さて、中国の小人のおじいさんがくれたのは、一体なんだったのであるでしょうか。